

玉藻前囃袂

二

三つ切 道春館の段

〔解説〕 三國傳來の妖狐の化現たる玉藻前の説話は謡曲「殺生石」に仕組まれて名高くなつた。これを材題とした淨瑠璃では紀海音の「殺生石」(一に今様殺生石)が古い。外題年鑑には元禄十六年二月豊竹座上場とあるか。この年月については疑はしく、或は享保初年かも知れない。材題を謡曲に取り玉藻前の傳説を忠實に取扱つた作である。處が同じ豊竹座に於て寛延四(寶曆元)年正月十四日から「玉藻前囃袂」が上演された。浪岡橋平・淺田一鳥・安田蛙桂三人の合作である。本曲は海音の「殺生石」を翻案して、次のやうな筋にした。鳥羽院の御宇に薄雲の皇子が右大辨時澄等と反逆を企てたが、阿倍泰成が右大臣藤原通忠と謀つて帝の寵妃玉藻前は妖狐の化現で那須原に飛去つたから、これを狩取るやうにとて三浦之介義明上總之介常廣を遣し、實は皇子をこゝに誘ひ出して討取らせる事とし、玉藻前は泰成の邸内に隠匿して置いたが、時節が到來するや、神鏡を奉じて囃袂をかきやかして表れるといふ趣向にしてある。

本曲は後に近松梅枝軒と佐川藤太との二人の手で増補改作されて「増補玉藻前囃袂」と題して、文化三年三月二十六日から大阪の御霊境内の操芝居に上演された。此の作では、妖狐の日本渡來以前の天竺及び唐土に於ける

經過を第一段第二段に於て示し、第三段以下が日本の事となつて居り、しかも右大臣道春の二女初花姫は入内して玉藻前と稱へたが、妖狐の爲に殺され、妖狐がその姿となつて帝を悩すといふ事にして、大筋を再び元に還してある。その組織を見るに、第一段は天竺であつて、沙牟呂山の段、同禁の段、班足王御殿の段、第二段は唐土で、姐妃入内の段、太公望濱の段、殷紂王御殿の段、第三段から日本で、清水寺の段、道春館の段、第四段神泉苑の段、廊下の段、十作住家の段、第五段訴訟の段、祈の段、須那野原の段、大切景事とかう分れて居る。

こゝに収めたのは言ふ迄もなく、この三段目の切であるが、これは寶曆元年の原作の二段目の切通忠館の段を取つたものである。文章にも相應に異同はあるが、大筋は相似て居る。但し原作ではこの事件を通忠（本曲では道春）存生中の事とし、且つ獅子王の劍を奪はれたといふ趣向はなく、只桂姫は皇子から召されても采女之助と契つて居るので應じないから、使に來た皇子の難掌、驚塚金藤次が雙六の勝負のあとで首を討つ、それが金藤次が捨てた實子である事はその殘して行つた扇に認めた文によつて判明する、通忠夫婦及び妹の初花姫は悲歎にくれるといふ筋であつて、段切が違つて居る。尙又原作では初花姫が入内して玉藻前となるといふ事にはなつて居ない、これも相違の一つである。

こゝに収めたのは五行稽古本によつて居るが、文章は文化三年刊行の丸本と同じである。

地フシはや夕陽も。傾きて。無常を告ぐる。來る。驚塚金藤治秀國。素袍の肩肘い。皇子様より御説の趣。地仰せ聞けられ鐘の音も。小ナクリいとど。淋しき黄昏や。かつげに。フシ上座にこそは押直る。地下さりませと。辭讓の詞に一揖し。オクリ間ごとを。照らす銀燭の光り。ま。斯くと知らせに館の後室。衣紋正しく。上意の次第餘の儀にあらず。皇子かねばゆきフシ白書院。地程もあらせず入り。出で迎ひ。同御上使様には御苦勞千萬。御懇望ありし獅子王の劍。今日中

に差上げるか。さなぐば。娘桂姫が首討つて渡さるゝか。二つに一つの御返答。サ只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけなき御難題。その劍は紛失致し。所々方々と尋ねれども。今に於て行方知れず。今暫くの御容赦を。ア、イヤそりやならぬ。皇子御心を懸けられし桂姫。たび／＼催促あると雖も。とやかくと言ひ延ばし。打捨て置かるゝ事。貴族の威勢鈍きに似たりと。以ての外。御慎り。劍がなくば桂姫。首にしてお渡しなされと。胸にひつしと萩の方。ッ途方涙にくれ給ふ。地後に始終桂姫。こなたの間に初花が忍んで様子立聞くと。知らず御臺は涙を拂ひ。手詰めになる上は。いづれ遁れぬ娘が命。未練の申し事ながら。夫婦ゝる憂目もいてたべ。詞過去り給ふ夫道春。夫婦ゝる憂目も

の中に子なきを愁ひ。清水のほとりな前生の。報いか罪か悲しやと。身を悔つて渡さるゝか。二つに一つの御返答。三神の社へ立願込め。三七日の参みたる御涙。フシとめ。兼ねてぞ見ええ。サ只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけなき御難題。その劍は紛失致し。所々方々と尋ねれども。今に於て行方知れず。今暫くの御容赦を。ア、イヤそりやならぬ。皇子御心を懸けられし桂姫。たび／＼催促あると雖も。とやかくと言ひ延ばし。打捨て置かるゝ事。貴族の威勢鈍きに似たりと。以ての外。御慎り。劍がなくば桂姫。首にしてお渡しなされと。胸にひつしと萩の方。ッ途方涙にくれ給ふ。地後に始終桂姫。こなたの間に初花が忍んで様子立聞くと。知らず御臺は涙を拂ひ。手詰めになる上は。いづれ遁れぬ娘が命。未練の申し事ながら。夫婦ゝる憂目もいてたべ。詞過去り給ふ夫道春。夫婦ゝる憂目も

玉藻菊賊秋葉豊

大盗玉藻菊賊秋葉豊

美月色交て八卦を天山の秋葉豊

運を一般に收めたるも周の軍平

信を打撃するも八卦を天山の秋葉豊

くして七宝代の秋葉豊

[illegible]

はらば。此上もなき御情と。地言はせらに見えさ

も果てず聲あらゝげ。詞ム、スリヤ三りき。詞工

神の咎めは恐れ。神の御末の皇子の仰 工様々の世

せ。御用ひはなされぬか。よしそれは迷言。見物

兎もあれ。上意を受けた某に。身代りするもまど

などゝは思ひもよらず。無益の問答聞ろしけれ

く耳持たぬ。サア只今と地詰寄つて。ど。ハテ何

いつかな痺ひりまぬ。フシその顔色。珊瑚珊瑚葉とせう是非

はぬところと胸を据ゑイヤ。なう御上がない。サ

使。詞武士は。物の哀れを知るといふ。きりくると

自らが一つの願ひはコレ此双六盤すこくばん。二一お始めなさ

人が命を天道の指圖に任せ。負けたるれ。が勝負

方の首を討たば。せめてはそれを定業ぢやうごふのつくが直

と。締めらるゝ事もあらう。どうぞ此
それと明か

義を叩了これうげん筋しん。
コレ。慈悲じひぢや青あおぢや。
立たり。取亂とくらん

聞分けて上。地義里上恩愛二傍て。尊ながう暇乞

スエカ、リ同
ふ戻は雨やさめ身て作りかゝる生煎。

母の毒の首難さ。お慈恵上へふり口直くちごものしとね孫山鳴こ

雨の日は、
フシギし間
は、
ひとりと
一本の。

增補 繪本 玉藻前三國續 軼力冊物 鶴沃之助

天竺沙年島の股

[illegible]

見るに母親たもち兼ねヌテわつとばかりに。伏沈む。地刀すらりと金藤治。調勝負は見えたる觀念と。地ひらめく稲妻姉嬢の首は前にぞ落ちにける。なう悲しやと初花姫。あへなき骸に取付いてフシ悲歎の。涙はてしなき。地泣く目を拂ひ萩の方。上使の傍に詰寄つて。詞ヤア狼狽へたか金藤治。勝負に勝つた姉嬢。なぜ斬つたさな殺した。それと悟つて初花が志。水の泡となつたのも皆其方が無得心。誑られたが口惜しい。地と身を顛はして腹立ち涙。上見ぬ驚塚せゝら笑ひ。詞ハ、ハ、しやら呉い咎め立て。勝負に勝たうが勝つまいが。仰せを受けた桂姫。首討つたが何誤り。皇子の御心背くかたぐ。悪く身動き召さるゝと。どいつこいつの容赦は致さぬ。すん込んでお居やれと。地権威を甲に傍若無人。振袖ひき裂き首おしつゝみフシ睨み散らして立出づる。地御臺はくわつとせき上げ給ひ。詞ヤア過言なり金藤治。女と思ひ傷つての難言無禮。右大臣道春が妻。そこ動くなと地標引上げ。長押の長刀おつ取つて石突ちやうど庭の面。八雙三段水車。母様は何事ととゞめ隔つる初花姫。邪魔しやんなと突退け勿退け。抄ふ長刀ひらりとかはし。詞ヤア猪口才な腕立てと。地首を片方に驚塚が秘術を盡す上段下段。運の極めか金藤治肩先四五寸斬下げられ。思はず跡へたぢくく。付入る刃むね蹴落され是とは駭寄る御臺の弱腰。どうと打付け動かせず。采女是にと飛んで出で。抜く手も見せず驚塚が脇腹ぐつと突つ込む白刃。急所の痛手にどつかと坐す。起しも立てず聲あらゝげ。詞皇子に媚ひ悪事をすゝめ。人を掛獄卒め。地思ひ知れやと刀の柄。ゑぐる腕首しつかと押さへ。詞ヤレ待て采女逸るな。言殘す仔細あり。ヤア此期に及んで何言譯。血迷うたか金藤治。イヤ血迷ひもせず後れもせぬ。先づ暫くと地押しとゞめ。苦しき息をほつとつき。詞元某は東國武士。下野の國那須野の何某。故あつて所領に放れ當地へ立越えさ迷ふ内。女房が初産。産み落したは女の浪々の身の悲しさ。雌龍の鰐形相添へて。五條坂のほとりに捨て置きしが。程なく妻も世を去つて。憂き年月を送りし内。思はず皇子の見出しに預り。當家に傳はる獅子王の劍。盗み取つて得させなば。一廉の侍に取立てんとの頼み。ハ、ア畏つたと忍び入り。奪ひ取つたはコレ此驚塚。ホ、御驚きの御尤も。慾に目がくれ悪人の。皇子に従ひ積惡無道。地かほど邪慳の心に

と改めて。召連れ来るべしとの勅諭。
ヤア／＼仕丁ども。いひ付けたる品早く持て。地アツト答へて白蠟に。更衣の装束忝／＼しくフシ御前に差出せば。
地はつと親子は有難涙。辭するは恐れと母親がとり／＼。着する五つ衣。綾シ立出づる。地コレナウ暫しと母親が。山へと三重へ別れ行く。

羅錦緋の袴。芙蓉のかんばせ手弱女首に名残の唱名は直ぐに黄泉の道しるべ。道の案内と鶯塚が。刀を抜けば。助はつつ立上り。詞我は是より姫が首がつくりと。もろくも。枯るゝ芭蕉葉。皇子の館へ持参して虚實を以て御剣をの。露の玉藻も濕ふ袖。しほり兼ねたる朝日の袂。雲井の御所や九重の大内。